

第4章

インド北東地方 言語をめぐる状況

井上 恭子

第1節 問題設定

インド北東地方の紛争はさまざまな形態をとっている。ナガ族やミゾ族による反インド分離独立武力闘争のように政治・軍事色の強い紛争、多数派人種・部族から少数派部族への組織的圧力と攻撃、逆に少数派部族から多数派への暴力的をともなう反撃、旧来の住民と新しく流入し定住した新住民の間の経済・社会的利害対立に起因する暴力抗争、アッサム州の少数派部族であるボド族が展開する自治州要求闘争など、多様である。これらの紛争の原因も多様である。多くの紛争に、複数の要因が絡んでいる。移住と定住が繰り返されてきた住民史、それによる民族構成の特性、山岳・丘陵・盆地・川流域平野部が複雑に入り組む地形による生活形態の多様性、イギリス植民地時代からの北東地方の隔絶性と孤立性、1947年のインド独立以降の国家形成過程、独立後のインド国内政治体制・経済開発のなかでの「僻地」としての位置づけ、また、中印対立・冷戦体制・近隣諸国関係といった国際関係の影響などが、それぞれのウエイトの差はありながら多くの紛争に深く絡んできた。

北東地方の紛争の分析には、これらの要素を慎重に検討し、解きほぐし、再構成する必要がある。そのための基礎作業は多岐に渡るが、本章ではまず、東北地方の紛争の際にひとつの対立軸として捉えられる住民（民族・部族）に注目し、紛争の背景としての住民構成のありかたを検討する。その際、住民特定の基準として言語を取り上げた。同一言語の話者が言語をアイデンティティの基礎として同一コミュニティを形成することは多く、とくに北東地方の言語集団の場合は、同一言語集団が同一民族・部族として特定される。そのことから、言語を通した住民構成を検討し、その特徴を抽出し、問題点を検討することは、北東地方の紛争の分析への重要な基礎作業となると考える。

第2節 北東地方の概要

インド北東地方（アルナーチャル・プラデシュ（Arunachal Pradesh）、アッサム（Assam）、マニプル（Manipur）、メガーラヤ（Meghalaya）、ミゾラーム（Mizoram）、ナガランド（Nagaland）、トリプラ（Tripura）の7州）は、インドのなかで特異な位置にある。北東地方の歴史、住民、自然、地形、生活様式は、インドの他の地方と異なる特性を持つ。たとえば宗教は、ヒンドゥー教徒が大半を占めるインド他地域と異なり、土着宗教が信仰され、イギリス植民地時代に浸透したキリスト教も広まっている。地形は、丘陵、山岳、川流域、盆地が入り組んでいる。西チベットを源とするブラーマプトラ川がヒマラヤ山脈を迂回してアルナーチャル・プラデシュ州を経て東から西に流れた後、メガーラヤ州の丘陵地帯を回ってベンガル湾に注いでいる。このことは流域に沿った人の移動を促した。言語は、インド・ヨーロッパ語族とドラヴィダ語族系の言語が主流言語であるインド他地域と異なり、チベット・ビルマ語族系の言語がほとんどで、しかもそれらは多数のさらに少数派諸言語に枝分かれしている。オストロ・アジア語族系の言語も話されている。

現在の北東地方住民の多くは、チベットやビルマから、さらにはタイその他から、川伝いに、あるいは山を越えて西に移動して定住した人々の子孫が中心である。長期にわたって移動・定住を続けてきたことで、時代により、また定住した土地により、言語的・文化的・生活形態的に多様な集団に枝分かれする結果となった。伝統的な生活様式は、インド他地域で見られるものと異なる点が多い¹⁾。近年は、インド他地域からの人々の進出・移住も多い。またバングラデシュからの非合法移住者も多く、旧来の住民との軋轢の元となっている。住民構成のモザイク性と住民の移動・流動性が北東地方の特徴のひとつである。

北東地方はビルマ、中国に接することから、イギリス植民地時代にインド他地域と別個の扱いを受けてきた。英領インドでの反英独立運動の浸透は遮られ、行政的にはインド他地域と異なる別個の管理体制下に置かれ、北東地方への入域・入植も規制された。隔離・隔絶がイギリスの北東地方政策の特徴であった。1947年のインド独立で北東地方はインドの一部となったが、イギリス植民地時代にインド他地域と隔絶されてきた歴史は、新生国家への統合に大きな障壁とな

った。第3節で見るように、言語的・宗教的な特性はインドとの一体性の確立を難しくした。

北東地方には、インド独立前から独自の存在を模索する動きがあった。1947年のインド独立に際してインドへの併合を好まない地域・住民の間で独立が指向され、1947年以降は反インド武装闘争を展開する民族・部族がでた。北東地方の、インド他地域と異なる住民構成と、インドから切り離されてきた歴史が、インドへの統合を困難とし、反インド運動・反政府運動への素地となった。独立後のインド政府の政策は、北東地方のこのような状況にきめ細かく対応してきたとは言えない。反インド分離独立要求の武装闘争に加えて、異なるエスニシティの住民間の抗争も多発している。たとえばアッサム州におけるボド族の自治州要求運動は、州で勢力的に優勢なアッサミーズへの武力闘争を伴っている。トリプラ州で1940年代末に発生し、さらに1980年に再発した反ベンガル人暴動は、先住者と入植者・流入者との対立であり、優勢なベンガル人に圧倒される旧来のトリプラ人の反抗という背景がある。

かつて北東地方は、北部のチベット、東のビルマと交流を持ち、南はベンガル湾のチタゴン（Chittagong）港に通じていた。しかし1947年のインド独立はこれらの経路を断ち切り、確定された国境は北東地方をインドの「僻地」とした。図1でわかるように、インド北東地方はバングラデシュ、中国（チベット）、ブータン、ミャンマーに囲まれ、インド他地域とは西ベンガル州北部の幅20kmのシリグリ回廊（Siliguri corridor）で結ばれているだけである。そのためインド他地域との交流は困難である。アッサム州を除く北東地方諸州は、物資の輸送をすべてアッサム州経由で行うことになる。北東地方は、シリグリ回廊でベンガル州北部に達し、その後インド他地域と繋がるという、まさにインドの僻地にある。また、地形の厳しさと道路網の不足から、物資の輸送のほとんどを空輸に依存している地域さえある。このような状況は、この地方の経済発展を困難としている。西ベンガル州からバングラデシュを通過してインド北東地方に達する方法がインドとバングラデシュ政府の間で協議されている。しかしインドが通過便宜の供与を希望する背景には北東地方の反政府武装勢力へのインド軍・治安軍のための物資輸送があるとされ、貨物の安全な通過の保障という困難な問題や、なによりもバングラデシュの主権に関わる問題を含むために、バングラデシュ側で政

治問題となっており、話し合いの進展ははかばかしくない。

表1は北東地方の人口と経済力を簡単に示したものである。北東地方で人口最大の州はアッサム州、最小の州はアルナーチャル・プラデシュ州である。インド総人口に対する各州の人口比から読みとれるように北東地方諸州は人口規模が小さい。SDP（州内生産）は、アッサム州を除きインド平均以下である。アッサム州の高い数値は、州内の石油生産がSDPに大きく貢献しているためであり、それを差し引くと同州の経済力は下がる。つまり北東地方諸州は、人口規模が小さく、しかも経済的に後進州である。

第3節 北東地方の特性：言語と宗教

次に、北東地方の特性を言語と宗教の面から概観する。言語（母語）と宗教を検討することにより、北東地方住民の多様性とコミュニティ帰属性の重要な一面が理解できる。

まずインド全体の言語事情を表2で見たい。表2はインドの18「指定言語（Scheduled Languages）」の話者人口と人口比、加えて各言語別に話者人口の多い州を記している。指定言語とはインド憲法第8付則に挙げられた言語で、話者人口が多い、ないしは言語・文化的に重要であるとして、保護と振興が政府に義務づけられている言語である。インドの主要言語と言ってもよい。北東地方で話されている第8付則言語は、アッサム州を中心に話されるアッサミーズ（Assamese）とマニプル州を中心に話されるマニプリ（Manipuri）さらに北東地方から北インドにかけて広く話者を持つネパーリー（Nepali）である。3言語とも18言語のなかでは話者人口が少ない言語である。

指定言語にその他の言語も含めて、インドで話されている言語を語族で分類したものが表3である。1991年センサスの集計結果である。話者人口が1万人以上の言語をとりあげ、その数が計114あるとし、それらを、インド・ヨーロッパ語族（言語数20）²、ドラヴィダ語族（同17）³、オストロ・アジア語族（同14）、チベット・ビルマ語族（同62）、セム・ハム語族（1）に分類している。話者人口最大の言語がインド・ヨーロッパ語族に属する諸言語で、これにドラヴィダ語族の諸言語が続いている。北東地方の言語のほとんどはチベット・ビルマ

語族の言語である。逆に言えば、チベット・ビルマ語族の言語は北東地方に集中している。チベット・ビルマ語族の言語は、人口1万以上で集計された言語数が62と、他の語族に抜きんでて数が多いのに反して、話者人口は809万人で、インド総人口の1%弱という少なさである。つまり、チベット・ビルマ語族の諸言語は、そのなかで比較的話者人口の多いマニプリを除くと、それぞれの言語の話者人口が極めて少ないのである。なおアッサミーズはインド・ヨーロッパ語族に属する。

また、集計には現れないが、チベット・ビルマ語族言語には話者人口1万人以下ながら独自言語とされる言語も多いものと思われる。このようなことから、北東地方では細分化された言語に基づく住民のコミュニティ帰属性があることが推測されよう。北東地方の住民が、同じチベット・ビルマ語族にありながら細分化された無数の少数派言語に帰属を主張する状況、ないし他言語との差違を主張するという状況があることが考えられる。

次に、表4で北東地方の宗教人口を見る。目を惹くのは、宗教人口構成がインド全体の構成とかなり異なっている点である。州で差違はあるものの、インド全体ではそれぞれ82%と12%を占めるヒンドゥーとムスリムの比率が下がり、代わりにキリスト教徒とその他宗教の比率が大きい。州別に特徴を見ると、アルナーチャル・プラデシュ州は、その他宗教信者（土着宗教、アニミズム）、仏教徒、キリスト教徒の人口比が大きく、ヒンドゥーは過半数を割り、ムスリムは全くの少数派となっている。アッサム州はムスリム人口比の多さが目立つ⁴。マニプル州、メガーラヤ州、ミゾラーム州、ナガランド州は、キリスト教徒の人口比が大きい。とくにマニプル州を除く後3州は、キリスト教徒が人口の過半数を占めている。イギリス植民地時代のキリスト教教団の積極的な宣教活動の結果である。逆にトリプラ州はヒンドゥーの人口比が全国平均を上回っている⁵。

宗教人口と並んで識字率を見ると、興味深い点が浮かび上がる。表5は北東地方諸州の識字率である。アルナーチャル・プラデシュ州を除き数値が全国平均に近いかそれ以上となっている。先に表1で北東地方諸州の経済力を見たが、北東地方を見る限り、経済力の低さによって識字率が下がるわけではない。北東地方諸州の識字率が全国的に見劣りしないどころか上回っている理由のひとつは、先に述べたキリスト教教団の布教活動と関係がある。

第4節 言語分布に見る北東地方諸州間関係

1. 北東地方の言語分布

第3節で明らかとなったように、言語的、宗教的に北東地方はインド全体のなかで特異な姿を有している。このことは、先に述べた地理的・歴史的要因とともに、北東地方を他のインドと区別する大きな要因となっている。

それと同時に、北東地方には、この地方をまとまったひとつの存在としてとらえることを不可能とする複雑な州間関係があることも認識しておく必要がある。独立後の反政府武装闘争や州間紛争、また地域紛争などは、北東地方の入り組んだモザイク状の住民構成に関係している。

ここでは再度言語をとりあげ、言語的モザイク状況の北東地方諸州の関係を検討する。表6は、話者人口1万人以上の北東地方諸語を話者人口の多い順に、各言語が各州でどのように話されているかを集計している。その際、インド全国で話者人口1万人以上を擁する言語のなかから、それぞれの話者人口が北東地方に全国比で50%以上いる場合に、その言語を北東地方諸語として取り込んだ。その数は58言語である。

先にあげた表3の言語分類との関連では、ここで挙げた北東地方諸語58のすべてが表3のチベット・ビルマ語族言語に含まれるのではない。話者人口の多いアッサミーズとマニプリのうち、マニプリはチベット・ビルマ語族に属するが、アッサミーズはインド・ヨーロッパ語族に属する。なお、ここであげた北東地方諸語58言語のなかには、オストロ・アジア語族の言語も含まれている。ただし資料の制約から各言語の属する語族は特定できなかった。同じく、58言語のうちどの言語とどの言語が近似なのかも特定できなかった。言語の近似性は、反政府武装闘争を展開するナガ族、ミゾ族といった民族について、それらの内部での近接性、敵対性を見る際に重要である。言語による分析はこれらの情報を組み込んでさらに展開していく必要がある。

なお、表6で挙げられている言語は、そのまま「人」、「族」として民族名・部族名に使われている。言語と民族が同一すると言い切ることはいないが、言語によりある程度コミュニティへの帰属が決定し、さらに多くの場合、とくに少数派言語集団の場合、同一言語集団を同一民族・部族として特定すること

も可能である。同一言語集団自身が言語を自己アイデンティティの基礎としていることから、原則として同一言語集団を民族・部族⁶として扱うことは可能であろう。

さて、表6からまず言えることは、ほとんどの言語について話者人口が特定州に集中していることである。アッサミーズ話者はアッサム州に、マニプリ話者はマニプル州に、ボド（Bodo）はアッサム州に、カーシー（Khasi）とガロ（Garo）はメガーラヤ州に集中している。

58 言語中 44 言語は、その話者人口の 90%以上が単一州に集中して居住している。続いて 8 言語集団数が、話者人口の 80%以上 90%未満が単一州に居住している。逆に集中度の低い言語集団は、アッサム州、マニプル州、ナガランド州に広がるクキ（Kuki）とゼミ（Zemi）、マニプル州とナガランド州にまたがるケザ（Khezha）、アッサム州とトリプラ州にまたがるビシュヌプリヤ（Bishnupuriya）などである。ただこの場合、集中度だけに注目するわけにはいかない。話者人口の大きな言語集団の場合、特定州に話者人口が集中しているも、他州にもいるその言語の話者が他州の土着言語集団を圧倒する場合があります。北東地方では、話者人口が大きな言語集団が大きな政治力・影響力を持つため、集中度よりはむしろ人口規模が重要な意味を持つ場合が多い。

次に、州を単位として見ていくと、ある州にある言語の話者人口が集中しているものの、その州の人口比で見るとその言語の話者は少数派となる例が多くある。つまり、ある州で、ある言語集団がその州に集中しているが、話者人口の規模から見ると州内少数派となる例である。そのような場合、多数派言語集団との対立が生じることがある。とくに問題が発生するのは、少数派であってもその言語集団がある程度の人口規模を持ち、州内のまとまった地域に居住しており、しかし政治・経済的には言語的多数派に抑圧されていると感じている場合などである。その一例として、アッサム州のボド族によるボドランド自治州要求の武装闘争がある。これは、アッサミーズの優越に対する少数派ボド族の抵抗であり利益拡大運動である。

州を単位として見た場合さらに、州内の人口的優勢言語集団数の多寡に注目する必要がある。表6で、たとえば人口5万以上の話者人口をもつ言語で切って州別に見ると、話者人口の過半数が州内に居住している言語数は、トリプラ州では

トリプリの1言語、ミゾラーム州でも1言語のみ、アルナーチャル・プラデシュ州では2言語のみであるが、アッサム州では7言語、マニプル州では6言語、ナガランド州では6言語もある。多言語状況には変わりないと言えるが、多言語状況の内容には違いがある。

2. 各州の言語状況

ここまで表6で、北東地方諸語について州別の話者人口の分布と集中を見てきたが、北東地方諸州にはインド他地域から流入し定住した人々がいる。このような人口流入が地域の住民構造を変え、文化・社会・経済摩擦を生み、軋轢となる場合がある。ときには、暴力による住民間の対立や外来者排斥運動を生む。1970年代末に始まり急速に暴動化していったアッサム州の「外国人」排斥運動は、外からの人口流入と、それに対する住民の反発に起因している⁷。

次に、このような外来の人々を含めた州別の言語人口構成を見ることにする。表7-1から表7-7までは北東地方各州別にみた話者人口1000人以上の言語別人口構成である。他地域からの人口流入に注目するため、表では北東地方言語と他地域言語を区別している。

なお、北東地方の各州の言語状況を説明する前に、北東地方全体について共通する特徴であり、かつ言語的人口構成を特徴づける点を2点、簡単に指摘しておきたい。第1点は、これまで見てきたように、北東地方諸州が多言語の州だということである。第2点は、北東地方諸語の話者がインド他地域に進出する程度は、インド他地域の諸語を話す人々とくにベンガーリーやヒンディ語を話す人口的・政治的に優勢な人々による北東地方進出に比べて格段に小さいことである。北東地方は、インド他地域からの人口の受け手であり、決して出し手であったことはなかった。そのことは北東地方に、インド他地域との関係また中央・州関係で常に、被抑圧者としての特性、受け手としての特性を与え続けた。

(1) アルナーチャル・プラデシュ

アルナーチャル・プラデシュ州で1000人以上の話者人口を持つ言語は15、そのうち北東地方諸語は13である。この州には単独多数派言語はない。言語集団として人口で1位のニッシ(Nissi) / ダフラ(Dafla)と2位のアディ

(Adi)は、それぞれ人口比 19.9%と 17.9%である。続いてインド他地域からの移住者の言語であるネパーリー、ベンガーリー、ヒンディ、さらに隣州アッサムのアッサミーズとなっている。それぞれの人口比は、9.4%、8.2%、7.3%、5.6%となっている。ネパーリー人口は北インド一体に広がっているが、特に北東地方にはかなりの移住者がいる。かれらは、イギリス時代に茶園労働者として、また建設労働者として導入され定住し、さらには土地を求めて移住・定住した。ネパーリーはアルナーチャル・プラデシュ州のみならず、アッサム州、メガーラヤ州でもかなりまとまった話者人口を擁する言語となっている。アルナーチャル・プラデシュ州にアッサミーズ人口が多いのは、同州がアッサム州を窓口にして存在しているという事情による。

アルナーチャル・プラデシュ州のみならず、北東諸州ではベンガーリー人口が多い。その理由は、ベンガル地方と北東地方との隣接性、ベンガル人の経済力、さらには、イギリス植民地政府が下級官吏などでベンガル人を重用したことなどである(表7 - 1)。

(2) アッサム

北東諸州で最大の人口を擁するアッサム州は、1000人以上の話者をもつ言語は46を数える。最大はアッサミーズ人口で、州の人口の57.8%となっている。次がベンガーリーで人口比21.7%である。ベンガーリーの人口増がアッサム州に緊張を生んできた。先に述べた1970年代末から拡大した「外国人」排斥運動は、一義的には東パキスタン(現バングラデシュ)からの流入者排斥を運動目的に掲げたが、底流には、隣接する西ベンガル州からの社会的・経済的に優勢なベンガル人への反発があった。

アッサム州の人口構成での別の問題は、アッサム州の在来民族間の多数派・少数派対立である。人口第3位のボドは、人口比5.3%強に過ぎないが、ブラーマプトラ川流域北部に広く居住している。ボドは、居住域を拡大するアッサミーズの圧迫を受けて流域部・平野部から丘陵地帯に追いやられたと主張し、ボドランドつまりボド独自の自治州を要求して武装闘争を展開している。

人口比第5位のネパーリーの存在は、上記アルナーチャル・プラデシュ州の場合と共通する(表7 - 2)。

(3) マニプル

マニプル州で話者人口 1000 以上の言語は 29 を数える。北東地方他州と違ってマニプル州の場合、北東地方諸言語数は 23 と優勢である。他地域の言語は第 6 位に人口比 2.5% でネパーリーがはいってくる。州人口の 60.4% がマニプリを話す。マニプリはアッサミーズと並んで、先に説明した憲法第 8 付則言語である。

人口的に優勢なマニプリに対して、数多くの少数派言語がある。第 2 位のタド (Thado) は人口比 5.6% で、以下少数派言語集団が連なる。多数派の優勢言語集団に対して無数の少数派言語集団がいるという構図は、民族・部族対立による紛糾の可能性を孕んでいる。

また、北東地方他州の優勢言語集団がマニプル州に少数派言語集団として居住している。ナガランド州のアオ (Ao)、ミゾラーム州のルシャイ (Lushai) / ミゾ (Mizo)、さらにアッサム、マニプル、ナガランドの広域に居住するクキ (Kuki) などの存在は、北東地方州間紛争の火種となりやすい (表 7 - 3)。

(4) メガーラヤ

カーシーとガロという 2 言語で州の人口の 80% をカバーしている。カーシーが 49.5%、ガロが 30.9% という構成である。メガーラヤ州の地形は山岳地から東にバングラデシュに下りていくという形をとっている。ベンガル地方と隣接するため、ベンガーリー人口が多く、話者人口第 3 位で人口比 8.1 を占める (表 7 - 4)。

(5) ミゾラーム

ミゾラーム州で話者人口 1000 以上の言語は 12 と、他州に比して少ない。言語構成は、ルシャイ / ミゾが人口比 75.1% と優勢で優勢言語の地位を確保している。続いてベンガーリーの 8.6% となっている (表 7 - 5)。

(6) ナガランド

話者人口 1000 以上の言語は 35 あり、多数派言語集団はない。話者人口の対州人口比が最大の言語は 14.0% のアオ、続いて 12.6% のセマ (Sema)、11.4% のコニャク (Konyak)、8.1% のアンガミ (Angami)、5.4% のポーム (Phom) な

どと続く。表6で見たように、話者人口がナガランド州に集中している言語は多い。それだけ言語構成が分化していることになる。インド独立前から展開され、独立インドの国家統合上の深刻な問題となった反インドのナガ民族独立運動は、これらのナガランド州言語集団により展開されていったが、その過程で諸言語集団間の対立・反目は、運動の分裂を招いた（表7 - 6）。

（7）トリブラ

話者人口 1000 以上の言語は 20 であるが、そのうち北東地方言語は 8 で、残る 12 は他地域の言語である、また、北東地方の他の州と違いトリブラ州では、北東地方言語ではないベンガリーが話者人口第 1 位（人口比 68.9%）を占めている。続いて地元言語のトリプリ（人口比 23.5%）となっているが、第 3 位は再び他地域言語であるヒンディとなっている。この地域一帯で優位なベンガル人の進出を如実に物語っている。1980 年代には反ベンガル人暴動が発生した。州の旧来の住民とベンガル人の反目は消えていない。ベンガル人が政治的にも経済的にも州で優位を占めていることから、表面的には平静であっても、このような住民構成から底流に不安を抱えている（表7 - 7）。

注

- 1 例えば、かなり広範に焼畑移動農業が続けられてきた。
- 2 表2の1、2、4、6、7、10、11、12、13、14、15、17、18 がこれに属する。
- 3 表2の3、5、8、9がこれに属する。
- 4 ベンガル地方からのムスリムの流入が理由の一つとして考えられる。
- 5 独立前のトリブラ・ヒンドゥー藩王国の内政に起因しているものと考えられる。
- 6 人口規模の大きなものを民族とよび、逆を部族と呼ぶことが多いが、民族・部族の定義は困難である。定義付けの必要性があるが、ここではそれに立ち入らない。なおインドでは、法的・行政的・社会的に保護を与えられるべき少数部族(minority tribes, backward tribes)が「指定部族(Scheduled Tribes)」と定義されている。北東地方の少数言語集団の多くは、指定部族となっている。
- 7 アッサム州の「外国人」排斥運動の標的はまず、バングラデシュから流入し定住したベンガル人であった。